「この中にニセ物のお嬢様が約一名
紛れ込んでおりますわ〜〜〜！！」
葉桜照月

お茶会のお席でそうお叫びになったのはお生徒会長の麺減小路 らら様でした。この日のお茶会もいつものメンバーで、

・麺減小路 らら
・自羅池 理栖華
・朱扇堂 凜
・朱扇堂 燭
・卦柄 玲華
・宝飯存 耶馬美

そしてわたくし――門巣滝 める。お爺様が一代で財を成した門巣滝財閥の一人娘ですがまだ家の歴史は浅く、華族の家系すらいるこの中では物怖じというものを感じざるを得ませんわね。

ら様と理栖華様は生徒会の会長と副会長で、ともに華族の家系。特に理栖華様のお父様は貴族院議員をなさっています。朱扇堂家の双子の姉妹は総合病院の院長の娘で、玲華様は世界最大の和紙製紙会社・卦柄和紙の跡取り。耶馬美様は「ぽいずん☆ヤバ美」の芸名で今を時めく人気アイドルでいらっしゃいます。

ですが、本日は朱扇堂家の双子の姉、凜様がさめざめと泣いておられます。燭様はいらっしゃいません。

今日は月曜日。連日開催されるお茶会の中でも大規模におこなう日ときまっています。それゆえにいつもよりも少し茶が濃くて、一週間で最大の楽しみになっているのです。残念なことにお外でお茶会など、出来る状況ではありません。ですからこの学び舎の生徒会室で、暖かくお茶会を行うのです。窓も閉めてとばりも降ろして、外のことに思いを寄せなくてよいようにしています。

このおハイソなお茶会において、「ニセ物のお嬢様」お呼ばわりはお最大級のお侮辱にもお相当します。私たちは皆一様に、

「ニセ物、とは。穏やかではありませんわね」
「ニセ物なんて、あり得ませんわ」
「ちくわ大明神」
「何か証拠があって言っているんでしょうね？」

と、口をそろえて非難します。それを静観していた理栖華様は、会長の言葉に捕捉するように、

「朱扇堂家の凜様が、そこでさめざめと泣いておられるのは、まぎれもなくニセ物のお嬢様がここに紛れているからなのです。凜様は……」

割り込むように、会長。

「体重が増えていたことをバラされていたのですわ〜！」
「そうです。それにより凜様は恥ずかしさに涙を流し、燭様はショックのあまり泡を吹いて寝込んでいるのです」

衝撃的な宣告を受けた我々に、大層な衝撃が走ります。
「そんな無調法をする者が……」
「お嬢様の沽券に関わる秘密の暴露、あり得ませんわ」
「そんな、ひどい……」
「まさか私達の中にその犯人がいるって言うんじゃない

でしょうね？」

誰かがそう生徒会の二人に聞くように詰め寄ると、理栖華様は一歩たじろぎますが、らら様は強気に、

「その通りでございますわ～～～！　それゆえに、あなた達がお嬢様の皮をかぶった白豚でないかどうか確かめるべく、取り調べを始めますわ～～～！」

＊＊＊お嬢様的な時間経過＊＊＊

「成程。すなわち、こういうことねでますわ～～～！

・ら　ら「りすかは嘘をついていない」
・りすか「れいこは嘘をついていない」
・れいか「めるは嘘をついていない」
・やばみ「こちら側のどこからでも切れます」
・め　る「ららは嘘をついていない」

この八千那由他光年に一人の天才・麺減小路ららにかかれば、この程度のロジックパズル、一刹那のうちに解決して見せますわ～～～！

……

……

……

……

……

……

……

ふむ。

無矛盾！　誰も嘘をついていないますわ～～～！」

再びおハイソなお茶会のお会場にお衝撃がお走りになる！

「これは行き詰りましたわね……」

「誰も嘘つきがいないなんて、あり得ませんわ」

「もぅぃ。無理。。。」

「面白い妄想ね。小説家にでもなればよろしくてよ」

会長の鮮やかな推理に、お会場が万雷の黄色い歓声に包まれる中、私は闇の集団によって隠蔽されていた『真実』に目覚めました。私は思考盗聴を防ぐため頭に巻くアルミホイル（トッ〇バリュは不可）を持ち合わせていないことを歯痒く思いながら、机を台パンし、皆の注目を集めます。

「そう、誰も犯人ではないのです。真犯人は別にいます」

「ほう、門巣滝さん。教えてくれますか」

「ふふ。ここにいる誰も悪くないと言っているのです」

「どういうことでますわ……？」

「まだお分かりにならなくって？　今、ここにいる全員は嘘をついていません。嘘をついていないならば犯人ではないでしょう。つまり、ここにいる誰も犯人ではない犯人はここにはいないのです」

「はあッ！？　まさかますわ～～～！」

「そうです。この一連の事件の犯人は――」

「朱扇堂燭。そう考えるのが一番理に適っているのです」

＊＊＊お嬢様的な時間経過＊＊＊

「開廷でございますわ～～～！」

最後の人類として八十億人ぶんの孤独を背負わなくてはならない我々にとって、『退学』、つまり追放は非常に大きな意味を持ちます。

裁判に立たされた燭様は、体重の増加はおろか二の腕、腰回り、おっぱい、おなか、おしり、ふとももに至るまでのサイズの増加を一ミリ単位で正確に把握していたのでした。その供述によってふたたび乙女のトップシークレットを公開された凛様は泡を吹いて倒れ、耶馬美様が別室で面倒を見ていらっしゃいます。

お茶会の会場をそのまま使用してはじめられた裁判は、裁判長をらら様、陪審員を理栖華様、麗華様、私で行われ、弁護人・検察官・傍聴人はおらず、被告人は当然燭

様です。まあ、裁判という名の断罪と言ってよいでしょう。らら様が最初に裁判についてを長く語る。
「……ますわ～～～！　なお、お嬢様刑事訴訟法第３３６条『被告事件について犯罪の証明がないときは、判決で死罪の言渡をしなければならない』、いわゆる『疑わしきは滅せよ』『疑わしきはサイバンチョの利益に』により、被告人には推定死罪が適用されますわ～～～！」

らら様の口上が終わり、理栖華様が、では被告人、何か弁解することはありますか、と聞くと、待っていましたと言わんばかりに、燭様は、

「私は単に、このお茶会の歪んだ構造に疑義を示したかっただけです。お茶会に激震を加えられれば、その手法は何でもよかった」
と、きっぱりと答えました。それは弁解ではない、あまりにもふざけた主張であって、
「やはり情状酌量の余地などあったものではありませんわ。裁判長、追放も致し方なしかと」
「カンシャクを起こしても無駄でますわ～～～！　有罪ますわ～～～！　『追放』ますわ～～～！」
判決が、下された。
それに対して、燭様は少しだけ焦ったように見えて、
「あなた達だってわかってるでしょう？　世界はもうどうしようもないんだって。私達は皆このまま人口が減るしかなくなった世界で自堕落に生き続けて、孤独ではないと自らを騙すため、傷の舐め合いの様に『お茶会』に興じている。過去の思い出を上演することで現実から目を逸らし続けている。それがあなた達の言う高貴さなのです。だとしたら――私は願い下げよ、そんなもの」
と、狂人の様に喚き続けるのです。
「いかなるときもお嬢様らしく在れ――その考えは正しかったかもしれない。けれども『お嬢様らしさ』が、その正体が名家の矜持を堅守し、執着することだとしたら、庶民の実情どころか世界の現実すらをも顧みないことだとしたら、既にお嬢様なんて肩書の一切が意味を持っていないこの世界では、それはいよいよただの『常識知らず』でしかない」
狂人は戯言を続け、陪審員の皆様の目は冷たくなっていきます。それに燭様も気づいたのか、一瞬だけ口を止める。そしてまた挑戦的な目で、
「お忘れなの？　マンモスお嬢様学校であったこの学園に今や7人しかいないのを。そして、私の『退学』によって6人となることを。そして、ここまで減ったのは、まぎれもなく私たちが下級の――――」
「おだまりになって頂戴ますわ～～～！」
「判決は既に出ましたますわ～～～！　ここは最高裁でございますわ～～～！　もはや逆転はありえませんでますわ～～～！　粛々とお受け入れになってでますわ～～～！」
「会長の言う通りでしてよ。我々はお嬢様として、世界が終わってなお、身命の尽きるまでお嬢様を続ける覚悟がありますの。それに水を差すような行為は、許されませんの」
会長と副会長が揃って反駁しました。いや、それはもしかしたら反駁と呼べるものではなかったのかもしれません。それを聞いた燭様は、
「ハハッ。腐ってるよ、アンタら」
私達をぐるりと見渡すとただそう言って、ニヒルに笑って見せたのでした。

＊＊＊お嬢様的な場面転換＊＊＊

こうして、私達は7人から6人になりました。しかしながら、妹を失った凛様の憔悴は著しく、5人になるのはそう遠くはないのかもしれません。

しかし、これはゲームではないのです。なにかの犯人を追放したところで、平和になるわけではありません。最後の一人になってさえ、平和にはなりえないのです。もうそんなものはこの世界のどこにも残っていないし、この学び舎でさえ、うわべの平和をうわべの役柄で誤魔化したうわべだけの世界です。
罪なくして罰はない。
ならば。
罪を自覚しない者には、何も罰となりはしない。
そうして私は、底の見えるほど薄い薄い紅茶――そして日に日に薄くなっている――をひと啜りし、外を見ないために降ろされたカーテンのその向こうを想像しながら、誰にも聞こえないように、呟きます。
――みんな、分かってるよ。